

# 私の終戦は奄美で

泰江歌子

鷺宮三丁目

昭和十二年七月七日盧溝橋で日中兩國が衝突し、日華事変がはじまる。これが世界大戦にまで拡大することは思いもよらなかった。

当時の日本は神国で過去の歴史から見て戦争は常に勝つものだと思つたのは、私一人ではあるまい。大陸ではつぎつぎと起る事件が日常茶飯事であつたからである。この年の物価は、パンは一斤七錢、塩は一キロ六錢六厘である。昭和十三年には、ガソリン節約のため、東京の青バス、乗用車の木炭車が登場する。牛肉が百匁一円五〇錢、白米が十キロ二円八七錢、この年の頃より日中戦争は戦線拡大の一途を辿り、街角には千人針を持つ女性がチラホラと眼に映る。出征軍人の旗の波が増えて来た。

昭和十四年には、ネオン、パーマネントも禁止となり、入浴料が六錢となった。流行語に「産めよ殖やせよ」「日の丸弁当」が登場し、流行歌に「愛馬進軍歌」があつた。

昭和十五年には米、味噌、醤油、マッチ、木炭、砂糖等、十

品目が切符制になり、門松が禁止され、英語が消えた。流行語に「万世一系」「八紘一字」「一億一心」等が登場する。流行歌に「紀元二千六百年」「暁に祈る」等があつた。牛乳が一合九錢であつた。

昭和十六年には小学校が国民学校と改称、ドレミファがイロハに改められた。

ついに同年十二月八日にはハワイ真珠湾奇襲攻撃に発展し、大東亜戦争に突入した。「勝つてくるぞと勇ましく」と出征軍人を送る軍歌や、旗の波が日本全国津々浦々になびき、南方に大陸にと送り出された。街々には千人針を作る女性の数が多く見られる。流行歌に、「進め一億火の玉だ」「空の神兵」等の歌声が流れる。

東條首相はラジオ放送で、皇軍は連戦連勝「同慶の至り」と言い、大本営発表は「敵空母〇〇隻撃沈」「敵機〇〇機撃墜」と発表する。当時の私はそれを信じていた。悲しい限りである。白米十キロ三四五〇錢、豆腐が七錢であつた。

当時私は、東京の陸軍兵器本廠でタイピストとして勤めていた。特に心に残るのは、天皇陛下という言葉が出る時、どこに居ても直立不動の姿勢になる。陸軍兵器本廠勤務中に「論功行賞」(国債参拾円也)なるものを拝命した。私は何の意味だか分からないが頂いた。

昭和十六年、戦時色が濃厚になったので、両親の勧めもあり、故里鹿兒島県奄美大島に帰ることになる。東京より国鉄で東海道線、山陽線を門司で鹿兒島本線に乗り継いで鹿兒島に着く。ここから海路一昼夜で故里に着くのである。海路は敵機に遭遇しないように祈りながら、灯火管制のもとに、明日の命も計り知れない不安に怯えながら我が故里に着いた。

幸い私は訓導(小学校教諭の旧称)の免許があったので、新学期から国民学校に勤務することになった。校舎は山を背景に、近くには澄んだ小川のせせらぎの音や、小高い所にあるので港がよく見える。教育の場としては理想的な環境である。

登校して眼につくのは国民学校の新しい表札である。校内に入ると、先ず小高い所にある奉安殿(天皇陛下の御真影を安置して在る殿)に最敬礼し、次に正面の山にある神社に敬礼をして、それから職員室に入る。

児童も同じようにして各教室に入る。余談になるが、奉安殿は、私の亡き父親が県庁の土木課に勤務していた時代に設計監督して竣工したもので、当時のお金で三〇円の大金だったとい

う。その父親も三〇年前に世を去った。

日本の四大節、一月一日、天長節、紀元節、明治節の儀式のとき、学校長が教育勅語をお読みになる。学校長が勅語を間違えると本当か嘘か首になると聞かされた。儀式のときは教師も、児童も暗れ着であり、女教師は紋付き袴であった。

さて、本校は国民高等科合わせて生徒数千人程度で、女教師は十名程である。私は二年生の受け持ちである。全校生の朝礼が終ると、一年生から高等科まで順を追って各教室に入り、授業を始める。「お早うございます」と挨拶が始まると、児童がニコニコと私を迎えるので、教職というものに対しこの世の幸せを感じる。先ず授業の前に児童の顔を眺める。それから五分間乾布摩擦をする。

教科書は、大部分が戦争に関連するものばかりである。何の抵抗もなく教師も児童も努力する。私の指導に理解をしてくれたときは、好きなこの道に満た満足感がある。ただ、音楽の時間のドレミファの音階のイロハにはなじめなかった。授業が終ると、児童と共に教室の掃除にかかる。上級生の週番が巡回して、黒板にも批評記録していくので、教師も児童も廊下や教室を丁寧に光らせるのである。これも勤労精神を培うためである。現在のような給食制度もなく、弁当を持ってくる児童は、勿論銀の飯など望めない。麦の混じったもの、或いはさつま芋の弁当である。

昭和十七年には衣料切符制になり、ズボンの穴を繕い、ズック靴も破れ、裸足で登校する者もあり、さまざまだ。危険なのは針やガラス破片で、足裏に刺さるのを最も恐れた。「ほしがりません勝つまでは」と指導しなければならぬには心痛んだ。更には授業中に、この頃から米機B29が一万メートルの上空から、時折無差別に爆弾を投下していく。町役場のサイレンの合図に、児童と共に裏山の防空壕に逃げ込む。常にこの事の繰り返した。

学用品も不足がちになり、習字は新聞紙を適宜に切って習い、作文は藁半紙半枚に、両面に小さく書くことの指導や、鉛筆が短くなったらキャップに差し込んで使った。

その頃の郵便葉書は三銭、封書は七銭である。昭和十九年頃になると戦局は悪化の一途を辿る。流行歌に、「特幹の歌」「予科練」「同期の桜」などがある。

鳥帰る 大君に捧ぐ 特攻の男ひと

この頃は低学年は休校、学校長、教頭、女先生、高等科のみ登校した。男の先生は、防備隊の名の許に山の兵舎に行く。米機に怯えながらの日夜である。爆音の止む束の間に、校庭で生徒と共に竹槍の練習をする。県道の山裾に、五、六〇メートル毎に横穴を掘り、当時の話では米軍が通ったら槍で突き刺すとの話であった。今思えば十世紀遅れたナンセンスである。

食糧増産といって、生徒、教師も防空頭巾を被り引率して、

稲の植付の作業がある。途中、敵機が急降下して、バラバラと無差別に機銃を浴びせて去る。「それ待機」と言って、各自は草叢くさむらや樹木の下に身を寄せる。人員点呼しながら必死の思いで作業場に辿り着く。この頃は、町役場も山に疎開してサイレンもない。故里には要塞司令部があるので危険このうえなしである。沖繩方面に行く米機B29が編隊を組んで通るので、教頭先生が上空を見張り、作業中に爆音があったら待機と合図する。

「そら敵機！」といって、アダンの根元や草叢など両脇に生徒と共に重なり、身を潜める。機銃の破片が一メートル先まで飛んでくる。人間の死の瞬間というものを体験する。人間の死の瞬間というものは無である。例え国策でも、十三、四歳の子供が何の抵抗もなく弾をくぐって作業するのには、哀れを感じる。作業終了後、人員点呼して、後ろ姿を見送りながら家路に着く。戦局は益々悪化し、学校も閉校となる。

さて、学年末の学籍簿（現在の指導要録）を防空壕の中で記入する。私は児童全員に甲を上げたい、修身も甲を上げたい心地であった。

私たち女教師は死と生の境に在る。常にリュックサック（帯の芯の手作り）に紋付きの着物、袴、身分証明書、かつお節等を入れて、女教師である誇りを持って、常に自決の覚悟をしていた。米機が沖繩に飛ぶ途中に爆弾を落す率が頻繁になり、町は危険になる。全面積は大部分山に囲まれているので、山小屋

を作り、家財道具や大切なものは運んだ。米機に気付かれないため、屋根に木を切って被せて擬装するのである。特に食事を作るためのあの煙には苦勞した。洗濯物は木の陰に干す。

米機は照明弾というものを落して暗い町の夜を昼のように明るくし、焼夷弾で焼き払った。明けて山の疎開小屋から見ると、我が家の餅つき臼が最後まで燻っているのが印象的であった。

生と死をさ迷う日々を送っている折、昭和二〇年八月十五日、中央の行政から伝達があり、終戦の大詔の「玉音放送」のあったことが知らされた。遂に日本には神風は吹かなかつたと私は苦笑し、悲しみも喜びもなく、無の心であった。教育が人間の思想を如何に左右するかと思うと恐ろしくなる。その日を境に爆音はなくなり、町は平静を取り戻した。学校も始まり、爆風で破壊された校舎の後片付けにかかったが、勉強の出来ることを喜び合い、生徒も頑張った。

しかし教室は不足で、裏山の神社の木の下で工夫して、曲がりなりにも授業を始めた。雨が降ったら校舎の廊下の隅で授業する。日の丸や戦争に関するものは、墨塗りして使用した。そして、今後の教育方針の転換することを祈った。

さて、平穏を取戻した我が故里も、食糧不足に対しそれなりの生活の知恵で克服し、蘇鉄の澱粉に米粒を混ぜてお粥を炊く。真っ黒ではあるが美味しい。消化もよく、昔から薬用として知らされていた。又さつま芋の茎を茹でて野菜にする。洗濯物は

台所の木灰の澄まし汁で洗う。よく落ちる。キラキラと銀の砂を播き散らした澄みきった常夏の空を眺めながら、露天のドラム缶風呂に入るのも良いものだ。

ドラム缶の 湯に浸りいし 天の川

敗戦の日本に残った我々は、戦争によって命を失った方々に報いるためにも、戦時中の忍耐の精神をもって、戦後復興平和のために今日の繁栄を築いたと思う。

そして我々島民の悲願であった奄美群島返還が、昭和二八年十二月二四日、日米協定調印によって米軍の統制下から日本の所屬に復帰し、終戦を迎えたのである。

これが私の戦時中の記録です。